

■ 概説:マーサ・ハリス(Martha Harris)を偲んで

Mrs. マーサ・ハリスの功績は、揺籃期にあった【タヴィストック】のチャイルド・サイコセラピイの研修コースの運営を1960年にミセス・ビツクから引継ぎ、その手腕を奮い、【タヴィストック】の礎をよりいっそう堅固なものとしたというのが定評である。だが、何よりも理論的な概念に固執せず、柔軟に一つひとつの臨床素材を念入りに繋げて意味を生み出す能力には優れたものがあつた。彼女はジョン・ボウルビイとは昵懇の間柄で、かつピオンにも傾倒している。さらには夫となるメルツァーとの奇しき縁も…。彼女の培った教養と、バランス感覚が、いふならば‘政治的’ともいふべき組織の人としての力量があつてこそ、その天賦の才が活かされたのであろう。が、やはり何よりも人間を育てる人であつた。雛を我が懐に抱え温める親鳥のように…。単に鼻眞目ではなく、斯くなる人をもはや【タヴィストック】に見出すことは無理と思えてならない。しかしながら、その人となりも著作もどちらかといえば、メルツァーと比較しても、どうも目立たない。欧州では彼女の著作は翻訳出版されている。彼女の功績を記念して、マーサ・ハリスの名を冠した教育センターすらも幾つかあると聞く。だが我国ではこの先そうした希望は無かろう。彼女の娘の一人、メグ・ハリス・ウィリアム(Meg Harris Williams)は、マーサ・ハリス並びにメルツァーの遺功を広く世に普及・伝播せんとめざましい活躍ぶりであるが、おそらく彼女の業績はWEBサイト(<http://www.harris-meltzer-trust.org.uk>)で閲覧可能となる限りかと思えば寂しい。語り口にけれん味がなく、平易であるだけに、ややもすればくなんだ、子育てのお話やら子どものセラピイのお話か…>と素通りされる。精神分析も、難しくない注目されないのだろうか。字面だけの‘謎とき’に懸命になるだけで、いのちに触れるということに疎くなるのは困ったことだと思う。我国日本においてマーサ・ハリスが‘市場的価値’を持ち得ないわけも分かる。私についてもまた違った意味で同様なことが言えるかも知れない、ふとそんなことを思ったりする。詮ないことながら…。



さて、マーサ・ハリスから直接語られた言葉で、私の記憶に印象深く刻まれた3つの言葉がある。

- ・resilience(強靱な精神力)
- ・baptism under fire(火の洗礼)
- ・privilege(特権的恩恵)

振り返って、これら3つの言葉が帰国後、実に私の30余年の日本での臨床を支えていたと思われる。因みに、それが私の胸裡にどのような意味を帯びるに至ったかという、《心理臨床に携わるとは‘火の洗礼’みたいなもので、‘強靱な精神力’が試される。さらには、それを経験し得ることは大概の人には許されない、或る種特権的ともいえる‘恩恵’なのである。故に、それを肝に銘じ、謙虚に身を慎み、弛むことなく目覚めて生きよ…》とでも言ったらよからうか(!)。

実際のところ、ロンドンの【タヴィストック】に在籍中、実に多くの方々との交流があり、誰彼からそれなりの影響を受けていないわけではない。懐かしい人の面影が幾つも心の内に尚も息づいている。だが、このように、誰かの語った‘言葉’が自分の中に深く刻まれ、尚も生き永らえて私自身を支えているなどといった経験はマーサ・ハリスを措いて他に誰も思い浮かばないのである。この事実は謎でもあり、実に特筆すべきものと思われる。ここに彼女という人の稀有な資質を考えざるを得ない。おそらく彼女の真価とは、人を鼓舞する何かを有していることだ。その人の語る言葉はパーソナルな (personal/個の) 次元での濃密な関わりに触れ得る何かであったといえよう。

マーサ・ハリスは、【タヴィストック】内では、譬えればカソリックの女子修道院での‘マザー’みたいなもので、【タヴィ】の child psychotherapists のトレーニング・コースのトップに立ち、他の教官たちそして私たち研修生 trainees の面々を抱える、統括者のお立場でいらしたから、畏敬の念を抱くばかりで、私などが彼女の真価を問えるはずもなかったわけだが・・・しかし、あの当時、私もタヴィの研修生という、いわば‘雛(ひよこ)’の一人として、彼女という‘親鳥’の懷に抱えられ、育まれていたことは間違いない。当時から彼女の著作を熱心に読んでいたわけではない。彼女について‘研究’し、さらにはいつか‘論評’しなくてはならない対象などと思ったことなぞない。例えばメラニー・クラインみたいに・・・ところが彼女の履歴を一瞥すると、M. Klein, W. Bion, それに Esther Bick にスーパーヴィジョンを受け、パーソナル・アナリシスは Herbert Rosenfeld とあるから、当時のクライン派を引き継ぐ頂点を極められた方なのだと解る。だが、当時は殆どそうしたことに私の関心は向いていなかった。クライン派といっても、まだまだぼんやりした感覚で受け止めていたし、まずは取り敢えず【タヴィ】の研修規定科目をこなすのに精いっぱい、それとてまた乳幼児観察セミナーやらワーク・ディスカッションセミナーがすこぶる面白かったから、嬉々として通っていた。

そして折りに触れて、マーサ・ハリスから口伝えにもらう‘ことばの糧’になにやら充ち足りた思いに包まれていたのは確かだ。授乳後に満足して眠りに入る赤子のように、殊更に彼女に愛着しているとも思わずに・・・そして帰国後、ずうっとこの歲月、振り返ることもなく、殆ど彼女のことは忘れていた。その近況については、Dr. メルツァーと一緒にイタリアやらフランス、スペインなど海外での講演旅行に精励されておいでなのは風のたよりでは折々に承知していたが・・・そしてマーサ・ハリスは1984年、車の事故に遭う。闘病の末、1986年の晩秋、身罷られた。この悼みはあまりにも癒しがたい。

随分と私の記憶が臆である。彼女の逝去を認めたくないからなのか、敢えて自分以外の誰かに彼女のとなりを語り伝えようとするのが辛い。だからなのか、想いが千千に乱れ、焦点がぼやける。空漠として、言葉がなんら浮かばない。気持ちちが‘迷子’になってしまってる。躓いた。さてさて、今ここでマーサ・ハリスについて何を語ろうかと考えあぐねていた。

そんな折も折も、一通の手紙がもたらされた。私どもに7年ほど分析にお通いでいらした或心理職の女性からで、妊娠を期にパーソナル・アナリシスをひとまず打ち切られたのであったが、その後めでたく

無事に男児を出産なさって、その旨私宛てにご報告くださったわけなのだ。出産のあらし、その後の子育ての奮闘ぶりなど丁寧に書き綴ってくださり、最後に私とのこちらでの分析体験を回想し、感想を述べてくださっておいでなりました。ここにその文面の一部を抜粋して紹介させてもらう。

《・・・(山上)先生との therapy は、私にとってはベートーヴェンの交響曲のようでした。No. 9に代表的なように様々な主題が立ち現れ、打ち消し、新しい主題が生まれ、更に変奏されていく、そして大きなうねりとなっていく。あくなき弁証法という感覚でした。ベートーヴェンの交響曲を聴く時がそうであるように、BGMで聴き流すことは出来ませんし、聴くのに力も必要で疲れもします。でもそこには豊かな深い世界が広がっていました。その意味で私が教科書で習ってきた精神分析とは違います。私は先生の therapy を受けることが出来て満足です。・・・》

このベートーヴェンの交響曲の‘主題の変奏’という言葉の響きに、はたと脳裡にマーサ・ハリスの面影が髣髴とした！ふいに懐かしい感覚が蘇った。〈ああ、そうだった、彼女って実にそんな感じだった・・・〉と。それは不思議とも妙ともいえる感覚だった。彼女の中の「山上先生」、そして私の中の「マーサ・ハリス」が重なったのだ！マーサ・ハリスが私になってるのか、私はマーサ・ハリスというわけなのかと、しばし呆然としたが・・・意外にもというか、知らずに自分の裡に彼女という存在の痕跡を認め、改めて深い因縁に気づいたという次第だ。かくして改めて、ミセス・ハリスの記憶にいのちが蘇った。久し振りに懐かしい感触を得た。お蔭で、俄然、記憶の糸筋を辿ることに弾みが付いたのは実に有難かった。

分析セッション中、テーマを追掛け、その主題が徐々に変奏してゆくというのは、確かにそれは分析家・山上千鶴子に間違いはない。相手にも依ろう、即ち状況が secure であること、つまり応答関係に信頼がある限りにおいてだが、私は興に乗ると、まさにそんな具合だ。実によく喋る。それで分析患者らはお説ごもともとただ聞いているだけでは毛頭ない。テーマを追いかけてながら、あっちこち伏流水を探検するかのよう、彼・彼女の無意識に私が水路付けしてゆく。その予想外の展開から、彼・彼女のレスポンス[応答]においてごく自然に連想が深まり、‘語りえなかった自分’の壁がぶち抜かれてというか、そこから漏れ聞える自らの声がおもむろに語られてゆくことがある。いのちの流れが動いてゆくとはまさにそんな感じだ。そのようにして、真に‘自分ごと’として率直に語る、彼・彼女の語る話に面白く耳を傾けることを私は何よりも喜ぶ。分析家‘冥利’に尽きる。

メラニー・クラインについても、おそらくそうだろう。「喋り過ぎる」という批判があったのを耳にしている。だが、メルツァーはそれに興じて、嬉々としてレスポンスしたのだだろう。語りかけられることの、そして語ることの嬉しさ、それを彼は生涯忘れ難いものとして、メラニー・クライン亡き後に、どれほど懐かしがり、恋慕ったことか。いわゆるクライン派の分析者たちに対して彼が感じる‘harshness (苛烈さ・手厳しさ・とげとげしさ)’は本来のメラニー・クラインとは無縁なものだ、と彼が嘆く所以である。

マーサ・ハリスもまた、メラニー・クラインから薫陶を受けている。彼女の主題の変奏のうねりを遡れば、

そこにはメラニー・クラインが居るに違いないのだ。連想能力とは‘想いを孕む’能力をいう。**sensitive、attentive、receptive**そして**responsive**であることが肝要だ。実にこれがマーサ・ハリスの真骨頂なのである。だが、もしかしたら、このセラピストとしての独特の感性(センス)は著作を通しては味わい得ないかもしれない。おそらく字面だけでは無理だろう。肉声に接して、それも語り掛けられる立場でしか、感得し得ない何か(something)であるに違いない。

理論構築ということであれば、彼女はメラニー・クライン、エスター・ビック、そしてビオン及びメルツアーに追随してるから、オリジナリティに欠けると見なされがちだ。どちらかという、メルツアーの陰に隠れて、華々しい名声を得るに至ってはいない嫌いがある。精神分析の伝統を担う在り方が違うのだ。メルツアーの主要な関心は、フロイト・クライン・ビオンといったそれぞれの理論的著作を網羅し、統一性・整合性を究めてゆくことにあった。だがメルツアーもおっしゃっておいでだが、マーサ・ハリスはどうもそうしたことにははんで関心が向かなかつたらしい。自らの感性の赴くまま、あくまでも経験重視といおうか…。そう言えば確かに、彼女の口から殊更にメラニー・クラインがどうでこうでビオンがどうでこうでといったお話が語られることなぞ皆無であったといていい。

精神分析はその科学性を重んじればどうしても「説明科学(explanatory science)」となろうけれど、やはり心理臨床の場に根ざしたところの精神分析を堅持しようとしたら「描写科学(descriptive science)」でなくてはならないと私は思う。事実、マーサ・ハリスは徹頭徹尾、セラピイの現場に即して、経験を共有せんと心を傾けた。‘**psychoanalytic observation**(精神分析的観察)’の奨励である。それは、あくまでもセラピストが対象への受容において‘主観性’を堅持しつつ、観察から芽生える連想の羽根を広げてゆくことなのだ。＜わたしはこう見た・感じたんだけど、あなたはどう見た・感じたかしら？＞といった問い掛けの姿勢に終始彼女は徹したといえる。これこそが‘臨床家魂’ではないか。

メルツアーがマーサ・ハリスを回想し、講演の折での彼女を述懐していたが、なるほどと思われた。実に懐かしかったので、その文章の翻訳を試み、《参考資料;その1》として掲載した。ご覧頂きたい。メルツアーが語っておいでのことは真実を突いている。講演中、彼女は話の始めにちよつと吃り、おたおたした感じがある、ところが直に話し続けるうちに俄然大きな熱情のうねりとなり、聴衆を引き込むさまには驚くべき才があったとのこと。確かにそうだ。思考回路が滑らかというか、あつちこつちに自由自在に彷徨う。それに明快ながらもあまり直截な物の言い方ではなく、斜めに的をちよつとずらした物言いだったように記憶している。断定を嫌うというか、相手に自分で考えさせてゆくというか…。どう見たか・感じたかを己れ自身の内で咀嚼・吟味することを促すのだ。真実‘教育者’とはかくあるべきであろう。

それから、＜なるほど！＞というのがもう一つ。メルツアーの文章から嬉しい発見があった。マーサ・ハリスはスコティッシュ・ダンスがお得意であったという話だ。彼女はスコットランド出身だから不思議ではないが、なるほどなあと改めて腑に落ちるものがあった。早速「スコティッシュダンス」をYouTubeで検索し、軽快なリズムを耳にしながら、リールを踊る人たちを眺めていたら、ふとそのなかに一瞬マーサ・ハリ

スを見たような錯覚を抱いた。群れの動きを意識しながら、その一方で常にそれに呼応するかたちで自分の立ち位置を見定めている。相手の動き、自分の動きが絡み合い、絶妙に綾を成して、そこに流動する線が描かれてゆく。そこに規律があり、かつ自由がある。皆と一緒に、でも誰しもが‘わたしが主演’。〈ほらほら、あなたの番よ。そして次はわたしの番ね…。〉 お互いの眼(まなざし)の中に自分が映っている。それを確認しあうことで、ここに自ずからパートナーシップが培われる。これぞスコッチ(the Scotchs)なんだ！日本の盆踊りとは断然違う。ここに打ち明けると、私自身盆踊りがまるで踊れない。密かに劣等感を抱いていたが、お手上げなのだ。からだが付いてゆかない。むしろモダン・バレエの祖ともいわれるイサドラ・ダンカンみたいに自由な振り付けで踊る方が性に合う。予め規定されたものに縛られることが嫌いで、自由気儘がいい。これは生来我が身に染み付いた、どうしようもない身体感覚だ。私がマーサ・ハリスにはついぞ成り得なかった理由がここにあると思うと、妙に納得した。

マーサ・ハリスの眼配りのうまさの秘訣は遡ればここにあったのだ。セミナーでの彼女は、個々にまなざしを注ぎながら、常にグループ全体をがっちりと統括していた。あの呼吸の掴み方、それは実にスコティッシュ・ダンスから会得されたものだった！あの手足を動かす妙技は、舌を動かす(言葉を操る)に似てはいないか！彼女の語法は、具体的であると同時に包括的である。ことばの綾に巧みで、流動感に溢れていた。実に刺戟的であった。そして己れのうちに湧き上がる、そして誰彼の中からも、思いつき・閃きを聞き取っては、テーマ性を次々華麗に追掛けてゆく。〈まだまだ[リールを]踊りたい、もっともっと…。〉と彼女が言ってるみたいに…。私が親しく彼女と一緒したのはまずは「乳児観察セミナー」だが、その折のグループを統率する彼女の手際の良さには深く感服し、甚だ忘れ難い印象を残した。今にしてその秘訣が思いがけなくもスコティッシュ・ダンスにあると合点したとは実に愉快ではないか！

個人的には、彼女にプライベート・スーパーヴィジョンを一つお願いしたことがある。St. Gerge's Hospital・児童精神科外来のセラピイの症例であったが、アンドリューという7歳の男児のセラピイ・ケースを指導してもらった。事実の断片を繋げてゆくお手並みには魅了された。特に赤子の彼が母親のおっぱいから顔を背け、からだをのけぞらすこと。それが母親を怒らせ、二人の関係は実に悪化を辿る一方であったわけだが。娘時代、彼女は父親と折り合いが悪く、気持ちが激して、ある時になどは彼に刃物で立ち向かったということがあった。彼女はでっかいおっぱいの持ち主で、当然それを誇らしげに息子に与えんとした。だが息子は残念ながら、それを喜ばなかったというわけで、女性性に乏しい、自信のない彼女にしてみると、許しがたいことであつたらう。喜んでくれない、もらってくれないという嘆きは、怒りやら恨みやら劣等感やらで、ただただ怒りの引き金になるという悪循環があつたらう。だがアンドリューにしてみれば、でっかいおっぱいはまるで枕を顔に押し付けられ、窒息させられる恐怖以外の何ものでもなく、しかもこのどちらかという凶暴なおっぱいは彼を卑しめ、去勢するところの、ナイフのような乳首＝父親ペニスを抱えもっていたわけだから、彼が内なる迫害的不安(persecutory anxiety)に脅え、自分の口の中に乳首を差し入れられることを頑強に拒んだ理由は実に分かるというものだ。これが来所時の彼の主訴「学習困難」に繋がっている。

彼の父親はどちらかというと温厚な性格で、事態に対して無力ではあったが、困惑しているという具合で。ただ、医療機関でのセラピーを受けるに当たり、協力的な姿勢であったことはラッキーであった。子どものセラピーと同時並行して、母親は面談を受けた。PSW[精神科ソーシャルワーカー]のサンデイが母親をなんとか繋ぎとめてくれたことがまたラッキーであった。感謝している。

マーサ・ハリスのコメントに‘sadismサディズム’というのがあったが、それは乳房との関係で、アンドリューがまさに被害者として迫害的不安に晒されていたことにも一因がある。その迫害不安が内的な現実であるのはそうだとすると、外的現実としても真にその通りなのだ。母子間のサディズムの‘伝達’はなかなか興味深いものがあり、この悪循環の糸を双方が断ち切ることが求められた。良心の呵責、それに償いの意欲が決め手となった。おかしなことに、アンドリューは母親そっくりな行動をした。自分がセッション中に作ったもの、描画やら紙細工などを持って帰ろうとする。ルール違反だと指摘してもダメで、彼は頑として言うことを聞こうとしない。つまり、セラピストの私にはあげないよというわけだが…。そして母親にそれらを与えんと躍起になる。それに対して、母親はいかにもそっけなくあしらう。まともに誉めるなり、喜んで貰ってあげるなどの態度にはならない。どっちもどっち。お互いをけなしあい、自信喪失と落胆と憤りを充満させてゆくのだ。

それが、そもそも何が発端か、現象のあれやこれや[臨床素材]を通してそこに流れる情緒の糸を手繰り寄せ、筋立てしてゆく。母子ともに共同して織り成す物語に耳を傾け、聞いてゆく。横糸と縦糸と…。それらの因縁が絡み合い、そして徐々にほどけてゆく。そして、その軛から解放された、親子関係性を築いてゆくことが可能になってゆくのを見た。見えてくる！ということに魅了された。

ここで一つ、マーサ・ハリスのスーパーヴィジョンで特筆すべきことは、子どもが使う言葉に対して切り込み捌いてゆく、そうした彼女の言語的感覚(センス)である。言葉が彼女の内で‘弾ける’瞬間があった。唸らされた！ 俄然、言葉の意味が輻輳的となるのだ。彼女が羨ましかった！おそらく幼少期に遡って、言語習得以前の象徴形成のごく初期の段階での言葉の‘音’への鋭敏さがあるからだろう。因みに、彼女は言語的発達ではとても早熟で、お喋り好きな子どもだったみたいだ。私も渡英後、当地の子どもたちの歌としてお馴染みの **Nursery Rhyme** (Mother Goose) をひと通り学んではみた。が、結局愉しめなかったわけで…。つまりことばの音やらそのリズムよりも意味そのものに執るからであり、日本語に‘翻訳不可能’だとむしろ苦痛なのであった。どうしても英語版駄洒落の類いが苦手。アナグラムのような言葉遊びもダメだ。つまり英語版ナンセンスがどうにも身に付かない。ユーモア的なイディオムを使えない。イギリス流ギャグの類い、言葉を引っ掛けたり、言葉遊びで相手を皮肉ったり、駄洒落を言って笑うことなどは、ついに英国滞在中の私には縁のなかったこと。疑いもなく、彼女とは言語的ルーツを共有していないのは明白と痛感された。英国永住もきっぱり断念している。彼の地に未練はなかった。やはり日本語への愛着が強い。自分のルーツに戻りたい。どうしても日本語による‘精神分析言語’に挑戦したかったわけで…。だが、この気付きはなかなか示唆的であった。

最近になって改めてマーサ・ハリスの著作に目を向けた。彼女の娘のメグ・ウィリアム・ハリスの編纂した著書【Tavistock Model】の中の《Tavistock Training & Philosophy》に最も彼女らしい熱情の一端を見た。そこで翻訳を試みてみた。《参考資料；その2》に掲載してある。ぜひご覧頂きたい。この論文は1977年に発表されている。当時の私はまだ【タヴィ】に在籍していたわけだが、すでに彼女は隠退を念頭に置いていたのかと思われる。‘後顧の憂いなし’とも言えない何かがおそらく背景にはあったのだろう。熱情の迸る文面のその裏側から、どこかもの悲しい旋律を響かせている。

万物は流転する。今がそのままに未来永劫在るはずもない。いかに【タヴィストック】を愛したとしても、いかにそれを不滅と念じようにも、そうした執念を時が嘲笑う。シェイクスピアのソネットに聡明な彼女はそれを聞いたのであつたらう。それにもかかわらず、あるいはそれなるがゆえに、そうした時の移ろいに尚も抗して、時を超克する何かを信じたい、伝えたいと念じたのであろう。それ故に、彼女は【タヴィストック】の記念碑たるものを残そうと‘フィロソフィー’と敢えて銘打って、筆を執ったものと思われる。

実に1977年、私は彼女の傍らに居た。そして私が帰国したのはその翌々年の1979年の秋であるが、その時点で既に彼女は【タヴィストック】を去っていた。どういう別離だったのか、まるで記憶がない。周囲が波立ったという印象もない。ただ辛うじて、最後に私の資格認定の件でお会いしている。その折り、彼女からのお餞別ともいえる言葉をもらっていて、それだけは印象深く残っている。＜Chizukoは日本に戻られたら、パイオニアにおなりなのね＞と・・・。ポンと肩を叩かれたような気がした。日頃の彼女に似合わない、ちょっとはしゃいだ感じで・・・。彼女は私の未来に何を見たのだろう。その時、私はその彼女の言葉かけに対し、肯定も否定もしなかった。日本での現状を説明する言葉を持たなかったし。曖昧に笑みで返したのだと思う。【タヴィ】での私の始まりは、彼女と共にあった。そしてそれが終わったのだ。彼女には深い恩義がある。この幕切れに際し、彼女がもっと私への期待感を吐露されたとしてもおかしくはない。だが彼女は飽くまでも控えめだった。＜頑張って！＞などということも口にはなさない。＜貴女にはできる・・・＞とやら、どうでなければならぬとかも一切ない。ある意味ではあつけない別れ方をしたものである。ここでふと思う。期待することはエゴを押し付けること、だから期待することで私の主体性を奪うことになると思ったのかしら。期待でチズコを潰してはいけないと・・・。

《参考資料；その2》として掲載されてある彼女の論文の末尾に、シリル・コナリーCyril Connolly 著の小説の題名『The Enemies of Promise』が引用されているのだが。これには胸を衝かれた。彼女が何故にこれを引用したのか、その真意は謎だが、個人的な感慨としては私にも解る気がした。この題名の含むところの意図はなかなか意味深い。promiseということばは、英和辞書では‘約束’とか‘保証’とか‘有望’であるが・・・。この小説にはシリル・コナリーの自伝的なものが色濃く反映されていると聞く。即ち、イギリスの最高学府に学び、未来を嘱望された青年がいた。だが彼は小説家としても成功は覚束ないまま、中途半端に結局のところは文芸評論で食いつなぐしかなかったという自嘲が込められているらしい。確かに、将来何かを為すだろう、しないはずはないと周りの誰彼から期待が寄せられる。若いうちは、有頂天にもなろう。「おまえは何ごとかを為すだろう」が、「我こそは何ごとかを為

すだろう」へ容易に転換されることにもなる。この外側からの評価、そして自らの内なる期待感が腰砕けになるとき、自らが己れ自身の‘敵’となる。絶望の中で自分を執拗に咎め立てする。そこで結局、自分は failure (腰砕けの敗者)だというのは辛かろう。自分に寄せられた期待感を自らへの期待感に繋げ、その重荷を背負うというのも人生の一つだろう。嘆くことでもない。

だが、我が身を振り返り思うに、私の経歴はそうした華々しさとは無縁と感じている。そうした重荷を背負うほどの格別のエリート意識も本来私には無い。だが、ああ、確かにそうなのだ。シリル・コナリーのように、自分が誰かの期待に応えられない、だから敗者だとは思ってはいなかったけれど、にもかかわらず、確かに私はマーサ・ハリスのいうところの日本で精神分析の学徒を率いる‘パイオニア’にはついでなれなかったし、それで非力な自分が情けなく、その思いを苦く噛み締めることがなかったとは言えまい。おそらくこれから先もずうと・・・。

誰しもがいつの日か、死を迎える。そのとき我が生を振り返ったとき、自らを慰めるものとは、外的評価ではあるまい。一人ひとりの心の内にある何ものである。それが虚しさに打ち克つものであるとしたら、もはや生の息吹を消せはしないだろう。つまりは、虚しさこそが‘死’の意味であるのだから・・・。

シェイクスピアのソネットを借りて、何を彼女は私たちに語ろうとしたのか。精神が‘火の洗礼’を受けた者たちの徴(しるし)を彼女は夢見たのであつたらうか。内なる人々の心のうちで【タヴィストック】は、断じて死に絶え朽ち果てることはない。もしも、その秘訣があるとしたら、脈々と引き継がれた【タヴィストック】の‘promise 契り’を‘敵’にするのではなく、我もまた担わんと‘希望’にすることにこそあるだろう。この果敢な挑戦こそが、実にマーサ・ハリスの訴えたかったことではなかろうか。それがまた、彼女の真骨頂たる強靱な精神力((resilience)ともいえよう。事実それを証明するものとして、熱烈に彼女を慕い、そして彼女を継がんとする者たちによる著作が昨今、数多く輩出されていることは大いなる励ましである。特には、『**ENABLING AND INSPIRING : a Tribute to Martha Harris**』(2012)がとりわけて私には嬉しく、歓びで心揺すぶられた。それは、かつて【タヴィ】でマーサ・ハリスの懐に抱えられていた‘雛’たちの心を込めた‘寄せ書き’であり、いうなれば亡きマーサ・ハリスの霊前に手向けられた、ことばの‘献花’でもあつたから・・・。

1979年私の帰国後、間もなくDr. W. ビオンの訃報に接した。Dr. ジョン・ポウルビイもこの同じ年に【タヴィ】を退職したと伺う。【タヴィストック】の一つの輝かしき時代の終焉であつた。当時の私は、Dr. メルツァー&Mrs. マーサ・ハリスを偲ぶ余裕を持たなかつた。そして今ようやく、である。懐かしいのだ！そして、私は彼らとの‘因縁’を生きてきたのだと改めてしみじみと思い浸る。シェイクスピアのソネット集のページを繰りながら、時空間を越えて、マーサ・ハリスの心の吐息を傍らに感じている。今や私自身も歳を重ね、あの【タヴィ】当時の彼女の年齢をいつしか越えてしまっているのだが、ようやく彼女に寄り添う気持ちになれて、それが嬉しかったりする。かくして‘因縁を掘り下げる’と己れ自身が見えてくる！それがまさに今私の実感である。そして、尚も未来を見つめてゆく。〔2013/08/20 記〕